熊本大学建築展2011「光の巣」

建築学科　３年　田中伸明　担当教員：桂 英昭

１．はじめに

熊本大学建築学科では毎年学部３年生が中心となり、「建築展」という学生有志による展覧会を行っています。この建築展は私たち建築学科生が初めて自らプロジェクトを企画、運営しモノ作りに打ち込むことのできる数少ない貴重な機会となります。

今回のプロジェクトを立ち上げるにあたって、私たちの中でどうしても避けることが出来なかった問題はやはり先日の東日本大震災でした。そこで私たちは建築学生ならではの視点からこの事態について考え議論を重ねていくうちに、現地へ行って仮設住宅を建てるというような、直接的なプロジェクトではなく、何か違ったかたちで自分たちが考えたこと、メッセージを発信していきたいと考えました。

【目的】

（ｉ）3．11東日本大震災をうけて被災地から遠く離れた九州・熊本で私たち建築学生が今何を感じ、何を考えたかを形とし、ものづくりを通してメッセージを発信します。

（ii）私たちが作った空間を体験してもらうことによって建築やものづくりの面白さ、私たち建築学生のエネルギーを伝えることが出来ればと思います。

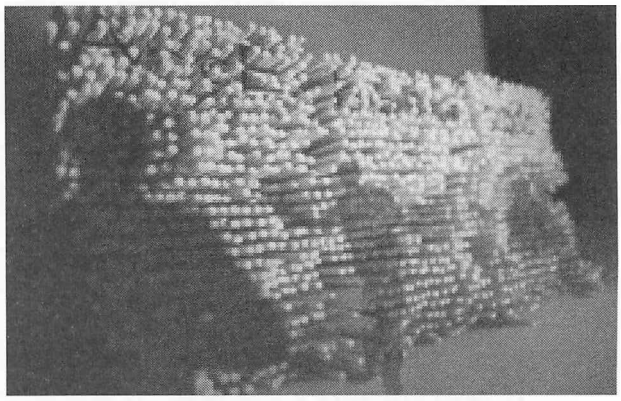
（iii）私たち自身の建築や空間に対する知識・理解も深まり、自分たちが考えたことをモノを媒体として表現する術やその難しさを学ぶことができます。

２.実施概要

今年の建築展では「人の繋がり」をテーマとした体験型空間インスタレーション『光の巣』を製作し、熊粋祭期間中に開催される建築展2011にて作品展示を行いました。　現代社会においてfacebook、twitter、mixiなどのSNSとよばれるコミュニケーションツールの普及・発達は著しく、目を見張るものがあります。SNSの魅力は“時間を共有せずしてコミュニケーションの場を共有できる”ところにあります。これは現代の「人の繋がり」のあり方を象徴していると言っても良いでしょう。そこで実際の建築空間にもこの性質を取り入れられたらおもしろい空間が生まれ、これからの建築空間のあり方、新しい形態の人の繋がり方の可能性を指し示すすることができるのではないかと考えました。

３．どのように形にするか

『人の痕跡が残る空間を創る』



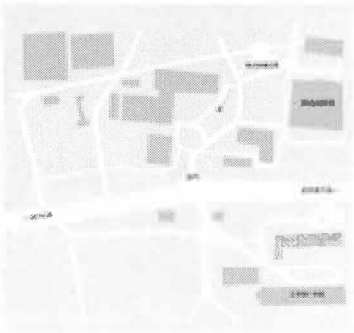
イメージ模型

イメージ模型のように人が押し引きすることで形状が変化するようなオブジェクトを制作しました。

空間に人の痕跡が残ることで、誰かが残した痕跡によって変化した空間を別の誰かが体験し、それが次々に連鎖していきます。このときこの空間は人の流れと時間の流れによって様々に変化していきます。人が自分の痕跡により他者に影響を及ぼすことで空間を介して緩やかに人が繋がっていく。ここでは人々が時間を共有せずして場（空間）を共有しているのです。

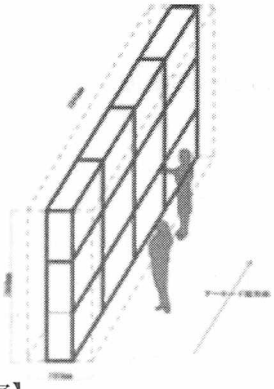
４．野外展示

10月中旬に熊大北キャンパス生協前広場にて実験的に制作物の野外展示を行いました。制作物をキャンパス内に設置し、建築展の企画を知らない人にもこの壁を鑑賞してもらいます。室外空間に作品を展示した場合の作品の見え方や、キャンパス 内に置くことでこの作品がどのようなるのかを実験的に調査します。 その調査をふまえ人の流れと時間の流れによってこの『繋ぐ壁』がどのように変化して いくのか、またどのような工夫をすれば人がより興味を示してくれるかを考察しました。また、夕方６時頃より制作物のライトアップも行いました。

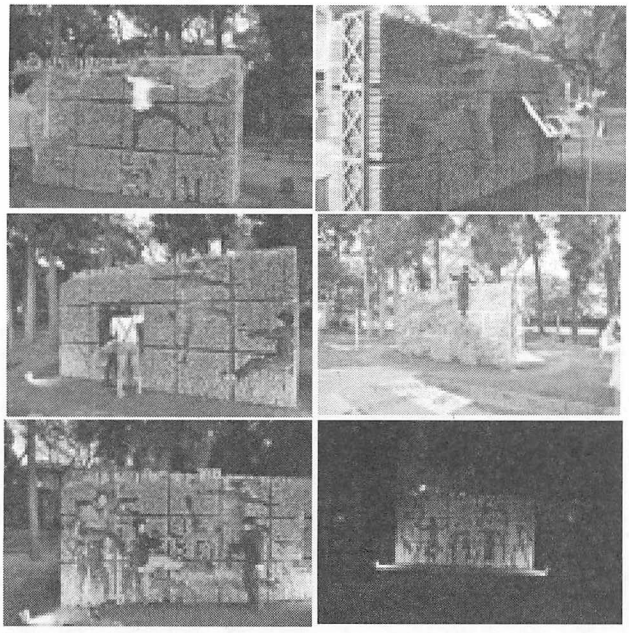


【展示方法】

１ユニット幅960㎜×高さ816㎜×奥行き400㎜のボックスに36㎜×27㎜×1000㎜の木棒256本（タテ16本×ヨコ16本）を規則的に挿入し、そのユニットの組み合わせで高さ2448㎜の壁を製作・展示しました。



【野外展示考察】



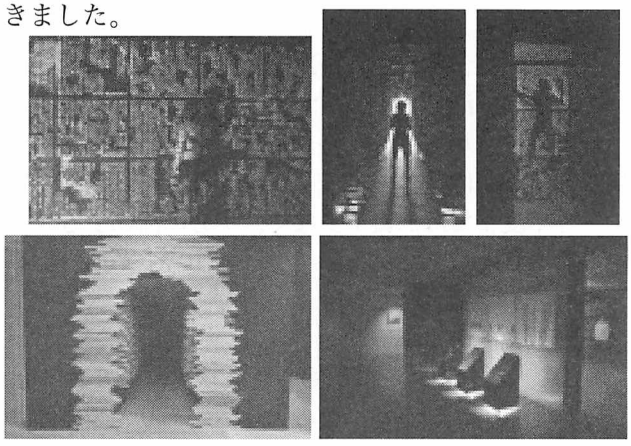
行き交う人々が次々に痕跡を残していくことで「繋ぐ壁」の形状がどんどん変化していきました。前の人が残した痕跡を次の人が体験し、次の人はそれを見てまた何らかの痕跡を残します。それが次々に連鎖していきます。ここで人々は同じ時間を共有してはいないけれど、この壁を介して場（空間）を共有していたと言えるでしょう。そして最終的に出来上がった形は、まるで一つのキャンバスに一人一人が少しずつ筆を加えていって完成した絵画のようにも見えてきます。

野外展示ではたくさんの方々にお越し頂きました。その中には「恋人の名前を作って写真で贈るなど私たちが想像もしなかったようなユニークな使い方をする人もいてとても興味深かったです。

このようにこの作品は私達の創造性だけでなく使う人の創造性によってさらにフレキシビリティが高く、可能性を秘めた作品になり得るのだということを野外展示を通して私達自身も気付かされました。

５．展覧会

熊粋祭期間中に工学部１号館６階製図室において展覧会を開催し、３日間で1,136人の方々にご来場頂きました。



６．おわりに

今年の建築展は3.11東日本大震災をきっかけに九州・熊本の建築学生である私達が感じたこと・考えたことをモノを媒体として表現したいという想いから始まりました。そのため例年とは全く異質な建築展となったのではないかと思います。

建築の分野では震災後の仮設住宅であったり、コミュニティの問題といった話は専門家のあいだで常に議論され尽くされており、学生がそのようなテーマを扱うのはとても難しいことです。それ故に私達も議論していく中で何度も何度も壁にぶち当たり、何度も何度も「本当にこのテーマについて私達なりの解を出せるのか」と挫けそうになりました。しかし、「今年建築展をやる僕らの代だからこそ取り組める問題だ」という強い思いから私たちなりの解を掘り出し、今回のプロジェクトを進め、無事終えることが出来ました。

このプロジェクトの中でイメージを形にする難しさ、その先にあるものづくりの面白さ、なによりモノを媒体として何かを誰かに伝えることの素晴らしさを知ることが出来ました。

このような経験を学生の間にできたことは間違いなく私たちの今後の財産になるはずです。まだまだ知識の浅い私たちに多くの助言をくださった先生方、快く協力してくださった大学関係者の方々、ご来場して下さった外部の方々などこのプロジェクトに関わったすべての方々に建築学科３年生一同深く感謝しております。本当にありがとうございました。